ツンボデ
お嬢さま子作り計画
小説 筆祭競介
挿絵 のりたま
二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

序章　幼すぎる三人家族　006
第一章　煉華見参　燃える髪のツンデレ姫　011
第二章　妊娠命令　さっさと私を孕ませなさい！　052
第三章　種付指導　女教師の子作りレッスン♥　095
第四章　女装潜入　ボテるためなら女湯でもするわよ！　126
第五章　催眠３Ｐ　ご主人さまにいっぱい中出しして欲しいニャン♥　156
第六章　花嫁奉仕　ウエディングドレスは脱がないで！　196
終章　一つ屋根の下　248

登場人物紹介

Characters

紗桜（ささくら） のどか

二十五歳のおっとりした物腰の女教師。小柄で胸も小さめで、可愛い雰囲気。

多々良（たたら） 悠斗（ゆうと）

優しい性格で、見た目はややショタっぽい少年。煉華とは幼い頃からの付き合い。

轟乃宮（とどろきのみや） 煉華（れんか）

悠斗の幼馴染み。超大金持ちのツンデレお嬢さまで、学園の一年生。年相応の体格をしているが、胸だけは巨乳。

『第二章　妊娠命令　さっさと私を孕ませなさい！』より

真正面から煉華の股間を覗き込み、思わず感嘆の声が漏れた。
――これが女の子の……煉華ちゃんのアソコ……。
女性器を見るのはこれが初めてだ。
雪のように白い柔肌に筋のような割れ目が一本通っており、それを保護するように唇のような形の肉土手――大陰唇が盛り上がっている。
想像していたよりも意外と生々しく感じなかったのは、割れ目がぴっちりと閉じていて、その奥の性粘膜がまったく見えないからだろう。それに加えて――。
「あ、あのさ……煉華ちゃん」
まるで股間に喋りかけているような構図である。
「な、なによ……」
「……まだ……濡れてないよね？」
「……そ、それ……どういう意味よ」
知らないからって笑うんじゃないわよ的な、こちらのリアクションを探るような口調であり表情だった。
どうやら煉華の性知識は大人顔負けのバストではなく、産毛オマ〇コのほうに近いらしい。少なくとも悠斗よりはウブなことは間違いなさそうだ。
――た、たぶん……オナニーとかもしたことないんだろーな……。

それでいきなり『種付け』をしろと言いだすのだから大物である。
しかし、悠斗もいざ『濡れる』という現象を説明しようとしても、上手い表現が見つからずに乏しい性知識を思い出そうと、視線を上げて首をひねる。
しかし、その行動が幼馴染みにヘンな誤解を与えてしまったようだ。
「なに？　アンタ、何を思い出そうとしてんのよ？　まさか他の女とシタことあるんじゃないでしょうね⁉」
「ち、ちちち違うよ！　僕はキスしたのだって、女の子のおっぱい触ったのだって、今が初めてだよ！　その、つまり、まーその……エッチな本とかに載ってた『濡れる』の意味を思い出そうとしてるんだよ！」
叫んでから気付く。自分は何を力いっぱい力説してるのだろうか？
ハアハアと肩で息をしているこちらに対し、煉華がボソっと一言。
「……ムッツリスケベ」
「……うぐぅ」
自覚していることを改めて指摘されると、チクリと痛い。
しかしいつまでも、こうしているわけにもいかない。
気を取り直して説明を続ける。
「え、えーと。濡れるってのは、その、つまり女の子がセックスをできる状態になること

で……その、あのー、たぶんアソコの中が濡れてくるんだと思うんだけど……」
「そ、そんなの初めてだからわかんないわよ……」
「だ、だよね。と、とにかく、僕の見たところまだ濡れてないみたいだから、その、煉華ちゃんをまずは濡らさないといけない」
「……どうやって濡らすの？」
「そ、その……煉華ちゃんのアソコを……その、エッチな感じでいろいろして……その……気持ちよくさせれば濡れると思う」
「……へ、へぇー」
煉華の表情が僅かに強張った。
ここまでの言動から考えて、彼女は百パーセント処女だ。悠斗にだって断言できる。
それだけに女性器を責められるという行為は、胸を揉まれる程度の今までに比べ、精神的な障壁の高さも違うだろう。
しかし相手は最初に『私を孕ませなさい』と命令してきたお嬢さまである。
「わかったわ。……全部、悠斗に任せる」
煉華は覚悟を決めると足をM字に開いたまま、ソッと長い睫毛を伏せた。
悠斗は改めて、ごっくんと生唾を飲み込み、幼馴染みの下半身に手を伸ばす。
M字に開かれた太腿を掴み、顔を幼い乙女の股間に落としていった。

ボディーソープの香りだろうか。陰毛の辺りからふわっと立ち昇る爽やかな匂いがまず鼻孔に流れ込んでくる。

それでいて超至近距離まで近づくと、ほのかに甘酸っぱい香りが混じった。

――うわー。なんだかすっごくイイ匂い……。

とても優しい香りなのに、妙に刺激的でいつまでも嗅いでいたくなる。悠斗は目をつぶって思いっきり息を吸い込み、心ゆくまで煉華の香りを堪能した。

「ちょっ、な、何いつまでクンクンしてるのよ。……そ、そんなので濡れてくるの？」

顔を真っ赤にした幼馴染みに睨まれて、悠斗はハッとする。

「い、いや、これはそのー、し、下準備みたいなもんなんだよ、うん」

相手が知らないことをいいことに、適当な言い訳をしてその場をごまかす。

「そ、それじゃあ、あ、あの本格的に始めるから……痛かったりしたら言ってね」

煉華が頷くのを確認してから、悠斗はゆっくりと口を近づけていった。場所が場所なだけに、敏感でデリケートなエリアだということはわかっている。指だと爪で傷つけてしまうかも、という心配があったため、まずは口を使ってみることにした。

何しろ悠斗にとってもこれが初体験なのだ。

慎重に舌を出し、そして大陰唇のぷっくりとした盛り上がりに這わせてみる。

「……っ……ぁんんっ」

舌先が牝土手の盛り上がりをなぞると、お嬢さまの身体がヒクンと敏感に痙攣した。漏れ聞こえた声のくぐもり具合に、それだけでやけに興奮してしまう。

――や、やっぱ……感じてるんだよね？

自分が同じ場所を舐められたらと考えると、経験はないが、気持ちよくないわけないだろうなと想像できる。

声を聞く限り、少なくとも痛みや嫌悪感はなさそうだ。

――そ、それじゃあ……。

悠斗は狙いを大陰唇の盛り上がりではなく、その中心に走る縦割れに移した。

「っ……っくふんっ！」

牝裂に舌を這わせると幼馴染みが鋭いくぐもり声を上げる。視線を上げてみると煉華は軽く顎を仰け反らせ、口元を片手で押えていた。少年は確かな手応えを実感し、当初は慎重だった舌の動きを徐々に加速させていく。

上下運動だけだった味覚器官を、力を込めて左右に動かし、ぴっちりと閉じているヴァギナの扉を開いていく。ほとんど抵抗感なく肉片が中に入り、ビラつく小陰唇にまで舌先が及んだ。その舌が潜り込む深さに比例して――。

びくん、ひくくン、びくヒクくんッ。

太腿の内側にある太い筋を中心に、女体全体が鋭く痙攣し始める。そして彼女の意思と

はおそらく関係なく、大きく開いた両脚が官能によじれて勝手に閉じようとし始めた。
――か、感じてる……。あの煉華ちゃんが僕のペロペロでこんなにも……。
悠斗は煉華の脚を掴んでいる両手に力を込めてM字開脚を維持し、さらに舌による牝華の探索を続けた。彼女があられもない反応をするたびに、いまだ制服ズボンの中にある己の分身が窮屈になっていく。
「っ……っふぁ……んはあぁぁあぁっ！」
牝裂の上部にある小さな粒状の突起を舐めてみたら、煉華がとうとう鋭い声を上げた。
――わっ、すごっ⁉　こ、これがクリトリスってやつ？
女性器にモザイクやボカシの入ったものしか見たことがないために、正確なことはわからない。しかしココが特に弱いことだけは確信できた。
「ああっ！　なっ、そ、そこっ……だめっ、そんなにっ、ああっ、っふぁあぁぁっ！」
豆粒状の突起を舌先で包み込むようにして舐め上げると、煉華の背中が跳ねるように弓反り始める。悶えようとする両脚の力みもさらに増し、軽く手で押しているだけでは開脚を維持できないほどだ。明らかに少女の身体が牝の喜びを示している。
――あっ⁉
そしてとうとう舌先に、自分の唾液とは違う濃いヌルつきを感じた。控えめに漂っているだけだった甘酸っぱい牝の匂いも濃密にムッと漂い始めている。

童貞の悠斗でも直観でわかる。煉華の女性器が『濡れた』のだ。
最初の目的を達成し、夢中で躍らせていた舌の動きを中断して一旦顔を上げた。
と、同時にお嬢さまが高く持ち上げていた背中をトスンと机の上に落とす。いつもツンと引き締まっている口元が半開きになって、はあはあ、と小さく息を弾ませている。
――い、今の煉華ちゃんすっごく可愛い……。
大人びてきてからはこの赤毛の幼馴染みのことを、綺麗と思うことは数限りなくあったが、こんなにも可愛いと思ったことはこれが初めてかもしれない。
「も、もう濡れてるよね？」
「……し、知らないわよ、バカ」
慌てて顔を横に向ける仕草も、いつもなら『ツン』と尖った音が聞こえてきそうな鋭さなのに、今のは『ぷいっ』と可愛らしい効果音が悠斗の脳内では鳴っていた。
――なんだかムチャクチャ、たまんない気分になってきた……。
このまま自分だけ服を着ていては先に進まない。悠斗は自らズボンを下ろし、トランクスも脱ぎ捨てる。
悠斗のペニスはすでにビンビンにそそり立っていた。片手で握ると全てが掌の中に隠れてしまう程度の長さと太さだが、一応包茎は卒業している。今みたいに勃起すれば、真っ赤な亀頭がちゃんと顔を出す。

縦筋一本の煉華に比べれば、自分のほうが多少は大人寄りなのかもしれない。
「そ、それじゃあ、は、ははは始めるよ」
異様なまでに声を上擦らせながら、幼馴染みの開いた脚の間に膝をついた。
「……っ……や、優しくしないと……し、承知しないからね」
いつも強気で、何も恐れるものはないという顔をしているお嬢さまの美貌に、一瞬、自分にすがりつくような色が走る。顔と身体の位置関係上、彼女が下から自分を見上げるような格好のため、上目遣いのその表情がなんだかとてもいじらしい。
ゾクゾクゾクゾクゾクっ！
普段とのギャップが大きいだけに、少年の背筋に稲妻ような牡の震えが走った。
「れ、煉華ちゃんっ！」
言葉にできない激情に突き動かされて、青筋立つペニスをまだ蕾の状態である幼馴染みの牝華に押し当てた。腰を突き出すようにして、先端を牝の肉裂に埋め込もうとする。
つるんっ。
しかし内腿まで滴っている愛液のヌメリで先端が滑ってしまった。
焦る気持ちを抑え、何度かチャレンジするのだが上手くいかない。
「ご、ごめん。そ、その、入れるところがわかんないから……そ、その……も、もうちょっと大きく脚を開いてもらえる？」

「……も、もう」
仕方なく煉華が自ら膝を抱え、黒のハイソックスを履いたままの両脚をM字に大きく開いてくれた。
再び縦筋一本に向けてペニスを突き立てていくのだが――つるん、つるるん。
上手くいかない。
焦る気持ちが悪いのか、そもそもセックスの仕方が間違っているのか。
何しろ全てが初めての童貞である。頭の中にある性交の知識は全てモザイクかボカシのあるもので、肝心なところは知らないのだ。
「もう、いつまでグズグスしてるのよ。それじゃあ、これでどう」
たまりかねた煉華が両手を自分の股間に向かわせ、M字開脚をしたまま中指で高く盛り上がった大陰唇を左右いっぱいに開いてくれた。
くぱぁ、とたっぷりと滴る愛液によって透明な糸を引きながら、桃色の牝粘膜が露出する。性に関して無知な処女の行為は、愚直なだけにその大胆さと卑猥さに遠慮がない。
――エ、エロすぎる……。
悠斗は再び鼻血を噴き出しそうになり、慌てて片手で鼻先を押さえた。ギリギリで踏み止まった若い血潮は小柄な肉体に循環し、男根はマックスまで膨張してペチンと音が鳴るほど強く自らの腹を叩いた。

「ちょっ……は、早くしなさいよ」
さすがに自分のしているポーズのエロティックさに気付いたのか、煉華が耳の先まで真っ赤にして行為をせかしてくる。悠斗は慌てて身を乗り出し、ビクビクとヘソに密着し続けているペニスを掴んで下に向けた。
見るからに弾力のありそうな、桃色の小陰唇が折り重なっている中心に、僅かに色素の濃い窪みが見える。そこがたぶん女の入り口だろう。自分が入れようとしていた牝裂の中心よりも随分下のほうだった。煉華は俗に言う『下つき』なのかもしれない。
悠斗は真っ赤に充血した亀頭をそこに合わせる。
ぐぷっ。
先端が牝肉の中に僅かに侵入した直後、煉華の両脚がビクンと大きく宙を掻いた。
「だ、大丈夫？」
「あ、当たり前よ……。アンタのちっちゃいのなんて……っくっ……ぜ、全然ヘイキなんだから……ふっふぁ……さっさと全部、わたしの中に、い、入れちゃい、な、なさ、い」
セリフの内容とは裏腹に煉華の口調も乱れがちだ。いつも強気にランランと輝いている青い瞳は涙で濡れたように艶っぽく潤み、凛々しく引き結ばれている唇は小さく開いて、あうあう、と甘い吐息を繰り返している。
いくら悠斗が鈍感でも彼女がヤセ我慢をしていることは察せられた。

しかし、下手に気を遣ったりすれば、今度はどんな無茶を言いだすかわからない。プライドを傷つけられるのが何より嫌いなお嬢さまなのだ。

悠斗だって、ここまできてセックスを途中で止めることなどできそうにない。

「う、うん。わかった。それじゃ遠慮なく……っくうぅ」

それでも細心の注意を払い、細い肉路を男根で掻き分けるようにして、慎重に腰を突き出していく。ミチミチと性器同士の結合を深めていくのに合わせて、幼馴染みが「くぅぅっっっ」と歯を食いしばり、きつく背中を握り締めてくる。

「す、すごいよ煉華ちゃんの中……むちゃくちゃ狭くてキツイのに、奥のほうまでヌルヌルしてて、オチンチンが勝手に吸い込まれていくみたい」

肉先で感じる温かな愉悦に頬をプルプルと震わせながら、初めて女の子と一つになる快感を率直に口にする。その言葉通り、吸い込まれるようにペニスが前に進んでいく。

「ば、ばか。は、恥ずかしいこと言うんじゃないわよ——んはぁっ！」

ヌルヌルのトロトロで湿り気百パーセントな蜜壺内で、何かがパンと弾ける乾いた衝撃が走った。直後、煉華が全身を弓なりに仰け反らせる。

ハッとして二人の結合部を見ると、破瓜の印が紅の筋となって流れ出していた。

「っふぁ——ああっ、とうとうわたし……悠斗と……」

見下ろす幼馴染みの目尻に、大粒の涙が浮かんでいた。

びっくりする。煉華の涙を見るなんて、いったいいつ以来だろうか。
身体を繋げたまま、数瞬唖然としていたら本人も自分の涙に気付いたようだ。
「こ、これは……その初めてだったから、その痛さでポロっと出ちゃっただけだからね。か、かか勘違いするんじゃないわよ」
そして再びプイッと横を向く。
言われるまでもなく、破瓜の痛みのための涙だと思ったのだが、煉華はいったい何と勘違いするなと言ったのだろうか。
「わ、私にこんなに痛い思いをさせたんだから、一発で種付けを成功させなきゃ許さないからね」
――一発で……って……。
先ほどの『くぱぁ』と同様、愚直に行為を促す言動がどれほど男の獣心を刺激するのか、この世間知らずなお嬢さまはわかっていない。
今にも暴発しそうな悠斗は改めて下半身を引き締める。
確実に煉華を孕ませるとなると、やっぱりできるだけ奥でイクのがいいんだろうな、と性知識の乏しい童貞少年は考えた。
腰を勢いよく振ったらすぐにイッてしまいそうなので、下半身ごと慎重に前進させながら、まずは入るところまで腰を深く押し込んでいく。

「ああっ、そ、そんなふうにされたらっ、っふぁ！　んんっ！　っっんはあぁぁっ……」
肉先が食い込んでいくたびに、煉華は背中をよじらせるようにして、女体を上へと逃がしていく。
「ちょっ、だめだよ、ふぁぁ、煉華ちゃん。う、動かないで」
「そ、そんなっ、っふぁぁ、こと、っっッ、い、言われてもぉ――んはぁっ！」
いつもは強気な意思表示としてツンと反らされる細い顎が、白い喉を剥き出しにするような官能的な反り方をする。
その瞳は涙の残滓でたっぷりと潤み、見ているこちらが庇護欲を刺激されてしまうほど可愛らしい。こんな煉華を見るのは、まだ小学生になる前の幼い頃以来だ。自分の腹の下でヒクヒクと官能に身悶える幼馴染みの艶姿に、少年の瞳が血走っていく。
「お、奥まで……煉華ちゃんの一番深いところまで入っていくからね」
お嬢さまに上半身を覆いかぶせると、両手で彼女の両肩をがっちりと掴み、絶対に上には逃げられないようにする。
そうしてから、改めて身体ごと腰を前に突き出していく。
温かな肉悦の泥濘（でいねい）に最も敏感な生殖器官を丸ごと沈めていく快感に、頬の震えが止まらない。華奢な肩を握り潰しそうなほど無意識に力を込めてしまう。
「っああっ……は、入ってくる……悠斗がっ、わ、私のお腹の奥までっ……あっっ……」

**『第五章　催眠３Ｐ　ご主人さまに
いっぱい中出しして欲しいニャン』より**

「れ、煉華ちゃん！」
膝で歩いて牝猫の尻をがっちり掴む。自分がたっぷりと中出ししたザーメンがトロトロと溢れ出ている、桃色の牝華に向けて勃起ペニスを差し向けた。
ぬずるるるるっん！
己の精液と煉華の愛液でヌルヌルになった膣内に、再び男根を根元まで挿し入れる。
――れ、煉華ちゃんて……バック向きのアソコをしてるかも……。
肉棒が侵入していく角度が、今までの前からよりもスムーズだった。そういえば初体験のとき、華芯の位置が思ったよりも随分と下で結合に戸惑った記憶もある。
「ふわぁぁ……こ、この格好だと……」
性器のハメ具合だけではなく、目の前に現れた光景もまた素晴らしい。
美しい背筋がスッと伸び、四つん這いの姿勢を維持するために肩甲骨とその周りの筋肉が形よく盛り上がっている。くびれたウエストから半熟状態の小振りなヒップへ続くラインは、溌溂とした健康美とほのかな官能性を併せ持った、少女ならではの絶妙なカーブを描いている。
煉華といえば巨乳というイメージが強く、また、悠斗も大きな胸が嫌いじゃないため常に前向きで交わってきたが、この体位もかなりいい。
「っふぁ……っ……はにゃぁぁ――んんっ！」

たっぷりと後背位での結合具合を味わってから悠斗は動き始めた。
少年の薄い下腹部が幼馴染みの双丘を打つ。タムッタムッと弾む小尻の揺れは巨乳のようなダイナミックさはないが、それだけに小気味よい。直接下腹に接触している臀部のまろやかな弾力も正常位では味わえないものだった。
――こ、これがさっきのまんぐり返しのとき、のどか先生が言ってたヤツか……。
臀部の中心で息づいている色素も薄く皺も少なめな可愛らしいアナルが、腰を突くたび遠慮がちに、キュッキュッと窄まる反応もたまらない。
何より悠斗の獣欲を掻き立てるのは、特殊メイクで本当に生えているようにしか見えない尻尾や、赤毛の中からチラチラと覗き見える首輪とその頭に載った猫耳だ。
四つん這いの姿勢で交わっている相手がそんな格好をしていると、本当に『女性』ではなく『牝』とエッチしている気分になってくる。
タムッ、タムッ、タムッタムタムパンパパパパンっ！
瞬く間に二人の肉がぶつかりあう音の間隔が短くなっていった。
「ふにゃあぁぁ！　ご主人さまぁ！　にゃにゃぁ！　ご主人さまぁぁぁぁッッ！」
ニャンニャンと喘ぐ幼馴染みの反応に、嫌でも妄想が加速する。
自分は本当に彼女のご主人さまで、煉華は飼い猫が擬人化した牝ペット。
今しているこれは人同士の愛の営みではなく、発情した牝との『交尾』。

「き、きき巨乳牝猫ペットに、も、もう一回たっぷりと種付けしちゃうからね！」
悠斗もこの倒錯した世界にどっぷりと浸かってしまっていた。
とめどなく溢れ出てくる妄想を思わず絶叫し、腰の動きを激しくさせる。
「ふにゃあぁぁ！　と、とどいてるぅ！　煉華のいちばん深いところに、ご主人さまのがズンズン突き刺さってくるみたいだにゃぁぁぁぁん！」
煉華本人もこの体位でのセックスが、自分の女体に合っていることをすぐに自覚したようだ。四つん這いの猫手がベッドシーツを掴み、その指先に悩ましげな力が籠っている。
悠斗はさらに牝猫を官能的に鳴かせるべく腰を強く叩きつけていた。が、その際に多少の違和感を覚える微かな反動を感じていた。
――えっ⁉　こ、これってまさか……。
細身の脇から激しく揺れる白い丸みがチラチラと見えて、その正体にやっと気付く。
胸の揺れだ。煉華ほどの巨乳で、なおかつ体格が華奢だと、胸の揺れが後背位のセックスに響いてくるのだ。
「あはん。煉華さんのおっぱいって、本当にすっごい迫力ねぇ」
その証拠に下になっている女教師が、猫耳少女の胸を掴むと違和感が消えた。
そうなるともう腰の突き入れに遠慮はない。
「ふにゃあぁっ！　んふにゃあぁぁぁぁっっ！」

肉先が相手の子宮を打つたびに、真下に見える煉華のアナルがキュッキュッと窄まる。燃えるような赤毛を振り乱すように顎を仰け反らせては、三毛柄手袋をした両手でベッドシーツを力いっぱい握り締めている。

「ら、らめっ！　も、もうらめぇぇっ！　いっいっちゃうっ！　イッちゃうううう！」

瞬く間に牝猫少女は昇り詰めた。

四つん這いの女体が息み、脹脛が、臀部が、肩甲骨周りの筋肉が、ビクビクと目に見えて激しい痙攣を始める。まんぐり返しセックスの途中で繰り返していた小規模な絶頂ではなく、本格的なエクスタシーが訪れていた。

「あらあら、だめじゃないのぉ。まだご主人さまがイッてないのに先にイッちゃぁ」

下になっている女教師がメッと猫耳少女のオデコを突く。

「ら、らっへぇ……」

「いいわよ多々良くん。続けちゃって」

「は、はい」

悠斗だって、これほど昂った状態で行為を止めることなどできない。

煉華が派手に絶頂し始めたために一旦止めていた腰の動きを再開させる。

いまだビクビクと色濃く絶頂の余韻を残す女体との交わりは凄まじかった。

こちらがペニスを一突きするたびに、

「んひゃぁぁッッ〜〜ッッ――んはアぁっ！　っふぁアぁ゛あ゛あ゛ぁぁぁぁぁッッ！」
ビクンビクンと顎を何度も仰け反らせ、子宮から絞り出すような絶頂の声を盛大に叫び続ける。そして四つん這いの姿勢を維持するために突っ張っていた両手の肘が、ガクガクと震えだし――その状態が保ったのは僅か数秒間だけだった。
派手な絶頂を続ける牝猫少女は肘から崩れ、下にいるのどかの上に崩れ落ちる。
「ら、らめらのぉ……っひィィっ……こ、これいりょうは……おかしくなっちゃうろぉ」
呂律の回らなくなった口で限界を漏らしながら、すすり泣く。
「しょうがないわねぇ。なら、多々良くんがイケそうになるまで、先生のオマ〇コ貸してあげる」
「ふぇっ⁉」
「別にいいでしょ？　一回ヤッちゃった仲なんだし。うふふっ。こんなこともあろうかと、パンツ脱いでおいたのよ」
悠斗は先ほどからイキっぱなしの煉華の女性器からペニスを抜くと、その下にある女教師の華芯に差し向ける。
すでにのどかのヴァギナは奥まで充分濡れていて、結合はスムーズだった。
「あはあんっ。やっぱり若い子のオチンチン、硬さが違うわぁ――んはあぁぁん！」
すると完全にへたり込んでいた煉華が後ろを向き、こちらをムッと睨んできた。

「らめぇっ！　ご主人さまのオチンチンは私のモノらのぉ！　浮気しちゃらめぇぇっ！」
「あはんんっ！　もう、何聞き分けのないこと言ってるのぉ」
「ヤダヤダっ！　ご主人さまは私だけのご主人さまなのおぉぉっ！」
再びフリフリと尻を振り、再度の結合を露骨にねだってくる。口を尖らせてこちらを睨む瞳には、ぶわっと大粒の涙が膨れ上がった。
「わ、わかったから、わかったから、泣かないで！」
悠斗は慌ててのどかとの結合を解き、再び煉華の尻を抱いた。
「ふにゃぁあぁぁッッ！　ああっ、イッちゃうっ、イッちゃうにゃあああん！」
ビクンっ！　ビクビクビクビクっ！
ヤキモチ焼きな牝猫少女は、たったの一往復で再び派手に絶頂してしまう。
暫く獣が咆哮するポーズで全身をビクつかせていたが、絶頂の衝撃が去ると力みが消えて再びドサッと女教師の上に顔を落とした。
激しすぎたエクスタシーの余韻に、口の端から涎を垂らして「っひぃィ、んひぃ」と引き攣った吐息までも漏らし始める。
「もう、そんなに自分だけイキまくってちゃ、肝心の種付けをしてもらえないわよぉ」
「ら、らってへぇ……」
そんな牝猫少女に女教師が、はぁっ、と溜め息をつく。

「しょうがないわねぇ。それじゃあ私と代わりばんこにシテもらうってことでいいわね？」
「くッッ……ッ……」
「ご主人さまに種付けしてもらえなくってもいいの？」
「ふにゅうっ……わ、わかったにゃん……」
「と、いうことになったわよ、ご主人さま」
グスグスと鼻を啜っている煉華の頭をヨシヨシと撫でながら、のどかがこちらに向かってウインクしてきた。
――か、代わりばんこ……ってことはつまり……。
「はにゃああっっ！　またイクっ！　イッちゃうにゃあああぁんッッ！」
「いいわよぉ！　イイッ！　もっとズンズン突きまくってえぇぇえぇっ！」
二人の女性器を行ったりきたりする、ねちっこい鶯（うぐいす）の谷渡りが始まった。
片やほぼ全裸に首輪を嵌めた牝猫美少女。
片やスーツ姿でパンティだけ脱いでいる女教師。
女性器のコンディションも対照的で、すでに一度中出しをされてビクつきっぱなしの若い牝華と、適度に濡れて奥の膣襞まで性にこなれている蜜壺。
――どっちのアソコも、すっごく気持ちいい！
幼馴染みに呂律の回らない喘ぎ声を散々叫ばせてから、女教師とねっとりと濃密なセッ

クスを楽しむ。その間、ヤキモチ焼きの牝ペットが後ろを向いてくると、グズらないよう猫じゃらしのように指を差し出した。

「ふにぁ～ん。ごしゅりんさまぁん」

すると煉華は自ら舌を出し、媚びるようにペロペロと指を舐めてくる。その姿は大好きなご主人さまに甘える牝猫そのものだ。試しに舌を出してみると、煉華はさらに積極的にむしゃぶりついてきた。

その間、下半身は女ボディーガードと濃密なセックスを続けている。

たまらないシチュエーションだった。

「つくふぁ、も、もう……も、もう僕もイッちゃいそう！」

いくら続けての二回目でも、瞬く間に限界まで達する。

長いストロークだった腰の動きが、すでに絶頂直前の小刻みなものに変わっていた。

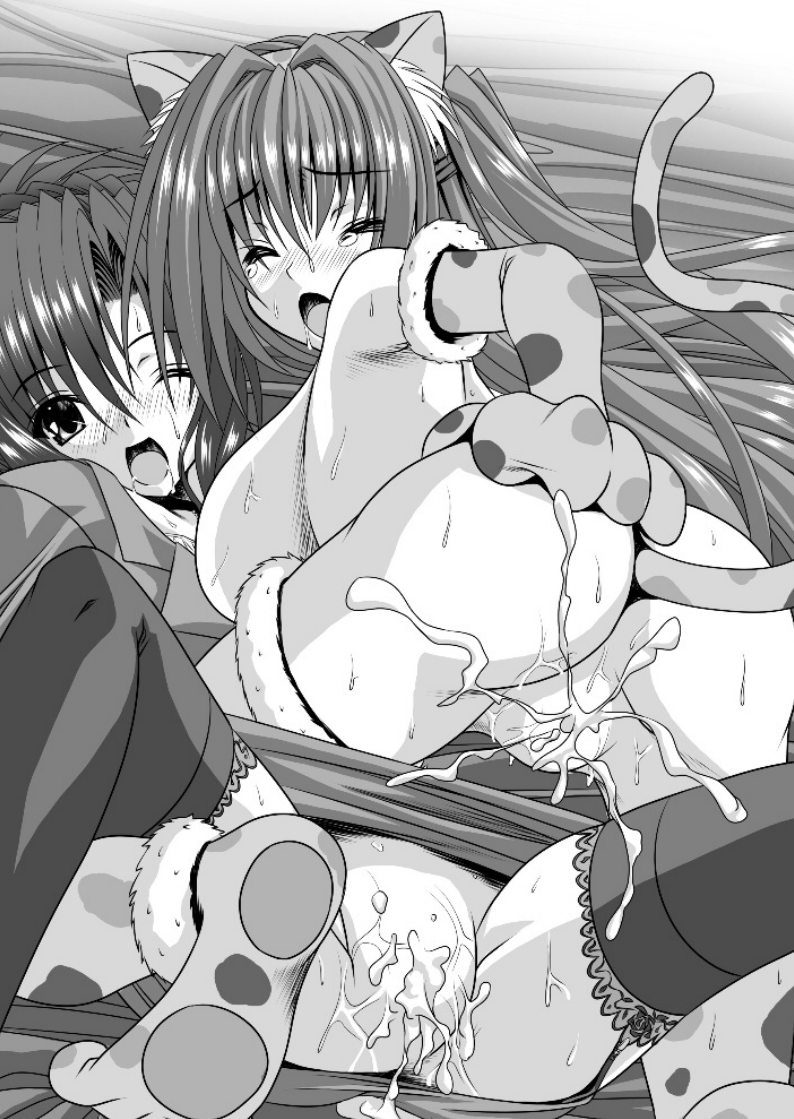
悠斗がそう漏らしたとき、ペニスはまだのどかの中だ。

「はぁあんっ！　いいわよぉ！　このまま先生の中で目いっぱい楽しんでから、最後の最後に牝猫ペットにトドメの種付けしちゃいなさい！」

女教師の言う通り、ギリギリまで彼女の中で射精欲を高めておくつもりだった。

「も、もうイクからね！　煉華ちゃんの中にもう一発、思いっきりぶちまけちゃうからね！　アソコに意識を集中させて待ってるんだよ！」

「あぁんっ！　欲しいにゃん！　ご主人さまのオチンポミルクで、煉華のお腹をポンポンにしてほしいにゃん！　もう一回、たっぷりドプドプしてほしいにゃん！」
すでに一度目の中出しと、その後のセックスでドロドロになった女性器がモノ欲しそうにヒクついている。後背位による性交で散々弾ませた小尻が桃色に上気していて、その素晴らしい抱き心地を己の下腹部に思い出させた。
悠斗は激しくのどかと交わりながら、煉華のくびれたウエストを左手で掴んだ。万が一にも的を外さないように視線は一点に集中している。
「あぁあっ！　いくっ！　もう、イッちゃうぅぅぅぅっ！」
叫ぶと同時に大きく腰を引き、ぬぽっ、とのどかからペニスを抜いた。
愛液にまみれた肉棒を右手で掴み、あらかじめ左手で掴んでいた煉華の腰を抱き寄せる。
ハメ慣れた牝穴のど真ん中に、絶頂寸前の男根を寸分の狂いなく一気に突き入れた。
「んはあぁ」
ペニスがヴァギナに触れると同時に煉華は仰け反り、
「あぁあぁあぁッッ！」
肉先が子宮に到達したときには顎を限界まで反り返す。
ビクビクと愉悦に痙攣する膣襞たちに引き絞られ、射精をギリギリで耐えていた男根が脈動を開始する。



ドリュン！　ドプどぷッ！　ドグドクどぐどぷンッ！
女教師の膣内でたっぷりと練り上げた性衝動を、幼馴染みの膣内で思いっきりぶちまける。すでに一度、たっぷりと中出しされているだけに、がっちりと噛みあった性器同士の結合部から逆流したザーメンが、ぶくぶくと大量に溢れ出す。
「はっ！　くふぁ！　はにゃ！　ふぁ！」
立て続けに二度も盛大に中出しされて、煉華は崩れるようにのどかの上にへたり込む。
悠斗は全てを吐き出し終えるとくびれた腰を離し、ペニスをゆっくりと引き抜いた。
はあぁ、と甘い溜め息をつき、改めて幼馴染みを眺める。
絶頂しすぎた煉華は意識を失ってしまったようだ。文字通り子猫のように身体を丸めて、スースーと寝息を立てている。
「まったく我儘な子猫ちゃんだったわねぇ」
煉華の下から這い出していた女ボディーガードが、雇い主の頬を指先でツンツンと突ついて微笑んでいる。彼女にもいまだセックスの余韻が残っているようで、横顔にはほっこりとした赤みを帯びていた。
そんな色っぽい女教師の顔が、不意にこちらに向けられる。
「多々良くんのご主人さまっぷりにも問題あったわよぉ」
のどかの指先が今度は悠斗のオデコをツンと突いてきた。

「煉華さんと一緒になったら、君がこの子の本当のご主人になるんだから、今のうちにしっかりしておかないとね」

そのセリフに悠斗はキョトンとする。

彼女の言う一緒になるとはつまり『結婚』のことで、ご主人とは『夫』のことだろう。

自分がこの超お嬢さまの煉華と結婚する？　夫になる？

二人の立場が違いすぎることを自覚してからは、考えもしなかったことだ。今までの種付け行為だって、あくまで彼女の意に沿わない政略結婚を阻止するためのもの。

しかし煉華が見事に自分の赤ちゃんを妊娠すれば、必然的にそうなることに――なるのだろうか？

「……」

煉華と結婚する状況を想像してみた。自分の性格を考えると、不安や怯えのようなものが湧き上がってくるはずだ。しかし――ドキンどきんドキン！

胸が異様に高鳴るだけで、まったく嫌だとは感じない。むしろ、どんな困難にも立ち向かい、彼女と二人で乗り越えていきたいと、余計な闘志まで燃えてくる。

――おかしいよコレ。なんかヘンだ……。こんなの僕らしくない……。

幼馴染みの安らかな寝顔を見つめながら、自分の胸の内に芽生えている未知の感覚に首を傾げる悠斗だった。

『第六章　花嫁奉仕　ウエディングドレスは脱がさないで！』より

そ、そうなのか？
特別に意識していたわけではないが、言われてみれば自然と視線が向いていたとは思う。
何しろこのビッグサイズ。彼女を見ればどうしても視界に入ってしまう。
「……おっぱいで……シテあげよっか？」
「……えっ」
「パ、パイズリっていうんでしょ？　男の子はおっぱいに挟まれたりするのも好きだってのどかさんに聞いて……。お、女の私にはよくわかんないんだけど……」
――お、おっぱいに……はさむ？
あのどれだけ揉んでも揉み足りないプリンプリンの柔肉の狭間にこのペニスを？
その行為がもたらすであろう快感を想像して悠斗は固まってしまった。
「やっぱり、やめとく？」
こちらの沈黙を別の意味に捉えたようで、煉華が小首を傾げた。
「してしてシテシテ！」
思わず連呼していた。
そのあまりの必死さに、お嬢さまが目を丸くする。
「そ、それじゃあ……」
改めて煉華が身を乗り出してきた。胸の谷間が露わなドレスを着たまま、自分の唾液で

濡れ光っている肉棒をその狭間に導く。そしてたっぷりと実った胸肉を、両手で脇から掬うように谷間方向に寄せあわせる――むにゅん。

「はくぅ～」

ペニス全面に押しかかった初めての感触に思わず愉悦の声が漏れた。蕩けそうなほど柔らかい。それでいて中に詰まった牝肉は、ねっちりとした弾力に溢れている。

「それじゃあ、う、動くからね」

胸奉仕の大まかなやり方まで、のどかに教えられているらしい。

床に両膝をつけたまま慎重に上半身を上下させ始める。無論、両手は脇から巨乳をグッと寄せあわせ続けたままだ。

ずにゅん、ずにゅずにゅ、むにゅむにゅにゅ。

フェラチオでたっぷりと塗り込まれた唾液が潤滑油となって、きめ細かな乳肌にペニスがねっちりとしごき上げられる。

「ああっ、す、凄いよぉ……ふあぁぁ、煉華ちゃんのおっぱいすっごく気持ちいい～」

見下ろせば己の股間を白い乳肉が覆い尽くし、それがタプタプと官能的に揺れていた。巨大な牝肉の塊に、小さな牡の象徴が全て包み込まれてしまっている。

「そんなに気持ちいいんだ……。悠斗のアレがおっぱいの中でガチガチになってる」

他人に奉仕など滅多にしたことがないであろうお嬢さまが、額にうっすらと汗を浮かせ

ながら懸命に胸を揺すり立ててくる。乳房の谷間で感じているペニスの反応や、思わず漏れてしまうこちらの喘ぎ声に刺激されてか、さらにその熱心さが増していく。
すると太腿の内側に微かにコリッとした硬さを感じ始めた。
気になって視線を向けてみてすぐにその正体に気付く。
――ひ、ひょっとしてこのコリコリしてるのは……。
煉華の乳首がドレス越しでもわかるほど硬くなっているようだ。改めて幼馴染みを見てみると、軽くハアハアと息を乱していた。
パイズリ奉仕の動きだけで、ここまで息が上がったわけではないだろう。
極めて官能的な瞳の潤みがさらに増し、頬の桜色も濃くなっている。
「ああっ。なんだか、い、今の煉華ちゃん……メチャクチャ色っぽいよぉ」
「……と、突然、何を言いだすのよバカ」
それまで一心に胸を揺すり立ててきた煉華が、恥ずかしそうに顔を伏せる。
――や、やっぱり……なんだかいつもと雰囲気が違う……。
彼女が自ら進んで奉仕行為をしているためだろうか。今見せた仕草や口調の端々などは、いつものようにツンとしているところもあるのだが、表情がどこか大人しい。
女の子らしい控えめさが覗(うかが)える。
それは前回の、発情した猫の暗示をかけられていたときとも少し種類が違う。彼女本来

の素顔というべきか、やはり昔の面影が垣間見えるのだ。
もっとしっかりと今の煉華を――繕っていない本当の煉華を見ていたい。
悠斗は無意識に片手を伸ばし、俯いた幼馴染みの顎をソッと掴んでいた。
そのままクイッとこちらを向かせる。
それはいつもの彼女なら激怒しかねない行為。しかしパイズリ奉仕に励むお嬢さまは、されるがままその赤い顔をこちらに向けている。
「煉華ちゃん」
「悠斗ぉ……」
二人は牡牝の肉体的シンボルでねちっこく交わったまま、唇を重ねた。
最初は軽く触れあわせるだけのキス。
しかし一拍置いて再度重ねあわせたときは、お互いに顔を斜めに傾けて唇同士を深く嵌めあわせた。煉華のぷりんと瑞々しい唇が、悠斗の唇によって大きく歪む。
舌もそれとほぼ同時に求めあった。
自分の唾液を相手の唾液と練りあわせるように絡めあう。
味覚器官の動きは煉華のほうが興奮気味で、悠斗はそれに動きを合わせた。
「んんっ……んっ……んちゅん……んんんっ……」
ヌルヌルと舌をねぶりあうたびに、痺れるような愉悦が走る。

それは相手も同じようで、さらに敏感にヒクンヒクンと身体を震わせた。己の胸を掴んでいる両手にキュッと力が籠り、さらに強烈にペニスを挟み込まれる。もともとピチピチに張り詰めている乳肌がさらに張り詰め、その大きな乳房の全質量が中に埋まっている小振りなペニスに一点集中した。

「っふぁ!?」

強烈すぎる柔肉の圧迫感に悠斗は鋭く喘ぐ。

小さく開いた口元からは、一瞬前まで貪るようなディープキスに没頭していた舌が僅かに露出する。煉華の舌との間に唾液の糸が切れずに結ばれたままなのが、そのディープキスの濃密さを物語っている。

「い、いくっ、も、もうイッちゃいそう！」

「いいわよイッて。私のおっぱいで、好きなだけイッちゃいなさい」

「……ホ、ホントにいいの？」

腰の奥に、もう引き返せない官能の昂りが発生している。

「このままおっぱいの中でイッちゃっても、赤ちゃんできないんだよ？」

「ああんもうっ！　そんなこともう気にしなくっていいってさっきも言ったでしょ！」

限界ギリギリで切羽詰まっている悠斗に対し、煉華の美貌には明らかに奉仕する悦びが浮かんでいる。それはパイズリ行為の熱心さに如実に表れていた。

「あんたのその情けないぐらい気持ちよさそうな顔を見てたら、おっぱいでシテあげるのを今さら止められないわよぉぉっ！」

今では両手でギュッと己の乳房を挟み込んだまま、上半身ごとダイナミックに上下させ激しくペニスを扱いてくる。

「ああっ、あああっ、あああああああ！」

その動きの熱烈さに比例して、悠斗の喘ぎ声も甲高くなっていく。

そんなこちらの様子をうっとり見つめていた煉華の瞳が、感極まったように細まった。

「ああんっ、悠斗ぉっ」

「――っんぐっ⁉」

お嬢さまがペニスを胸で挟んだまま首を伸ばすようにして、喘ぎ声ごと再び悠斗の唇を塞いでしまう。踊り込んできた舌がこちらの舌を搦め捕り、己の口内に引きずり込む。さらに頬を僅かに凹ませて、呑み込んだ舌をむちゅうううッと強く吸ってきた。

味覚器官の密着度合いがただ絡めあうだけとは違うレベルに跳ね上がる。口腔粘膜が一つに溶けあうような快感に、迸る愉悦の質と量も倍増だ。

明らかに煉華が奉仕に興奮していた。悠斗のペニスをがっちりと挟んで離さない両乳房を夢中で揺する動きにもそれは表れている。

――イクっ！　も、もうイッちゃいそう！

強く吸われながらピチピチと絡めあわせていた舌が、全身が息むと同時にビクリと硬直する。ふぐっ、と煉華の口内に向かい愉悦の呻き声を迸らせたその直後――。

どぴゅン！

ペニス全面を押し包む柔肉の圧迫感によってさらに細められた尿道の中を、灼熱の粘液が一気に駆け抜けていく。

ドプどぴュッ、どりゅドプぷぷンっ！

悠斗はギュッと挟まれ続けている胸の谷間で、思う存分牡欲を吐き出し続けた。

しかし煉華の巨乳に包まれているために、ザーメンが飛び散るようなことはない。傍目には、悠斗がいきなり全身をビクつかせているようにしか見えなかったはずだ。

「んんっ⁉　っ……んんっ……んっ……んんん……」

しかし無論、煉華は自分の胸の深い谷間の奥底に吐き出されるザーメンの熱さで、こちらの絶頂を悟ったようだ。激しかった舌の動きが穏やかなものに変わる。

少年の脈動は長く続いた。その間ねっとりとしたディープキスを楽しみながら、柔らかな乳肉の狭間で欲情を吐き出す快感を存分に味わう。

悠斗のビクつきが完全に止まると、そこで初めて煉華が顔を離した。改めて見下ろす豊かな胸の谷間には、その中に留まりきらなかったザーメンが溢れ出ていた。

「気持ちよかった？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円(税込)

呪詛喰らい師（カースイーター）

［小説：蒼井村正／挿絵：或十せねか］

セクシー退魔師が神様をご奉仕で鎮める伝奇アクション!

ピルグリムメイデンII 白装の騎士

［小説：狩野景／挿絵：ぽち。］

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

魔海少女ルルイエ・ルル

［小説：羽天向／挿絵：ピエール☆よしお］

「魔法の天使ルルイエ・ルル!
地球の未来はルルにおまかせよっ★」

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- ●仙獄学艶戦姫ノブナガッ!! ①〜③
- ●思春期なアダム ①〜②
- ●絢爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
- ●借金お嬢クリス ①〜②
- ●プリンセスリバーシ!! 交錯する美姫と魔姫
- ●BLANGEL 輪になって踊る愚者の夜
- ●無敗の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ●ピルグリムメイデン 深紅の巡礼聖女

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!